

スピノザの「物体」観

——物理的基体無し of 自然像——

松田克進

(受付 2006年5月10日)

序

本論の意図は、スピノザの自然像において、「延長様態 (modus extensionis)」という概念が如何なる存在者を意味するのか、換言すれば、スピノザの自然像における延長様態の存在論的位置付けが如何なるものか、を明らかにすることに有る。

スピノザは、『エチカ』第2部定義1で「物体 (corpus)」を次のように定義している。「物体とは、神が延長した事物と見られる限りにおいて神の本質を或る一定の仕方で表現する様態のことと解する (Per corpus intelligo modum, qui Dei essentiam, quatenus, ut res extensa, consideratur, certo, & determinato modo exprimit)」。すなわち、スピノザにとって「物体」とは延長様態を意味する。それゆえに、本論の意図は、スピノザの自然像において「物体」という概念が如何なる存在者を意味するのか、を明らかにすること、とも換言され得る。

常識的理解に基づけば「物体」という概念は様々な物理的状態を持ち得るところの物理的基体を意味する。ところが、スピノザの形而上学においては、物体 (=延長様態) は物理的基体ではなく、運動および静止という物理的状態による構成物である。すなわち、スピノザは物理的基体を排除するところの (少なくとも当時としては) 非常に特異な自然像を提示しているのである。私は本論で、『エチカ』第1部および『単論文』のテキストに基づきつつそのような解釈を正当化する。

1. 「物体の状態化」か「延長様態の基体化」か

すでに見たように、スピノザは『エチカ』第2部定義1で「物体」と「延長様態」とを等置している。この等置は哲学的に見て非常に特異なものである。

「物体=延長様態」という等式の左辺「物体」は伝統的に物理的基体を意味する概念である。すなわち、「物体」とは、伝統的に、形や運動や大きさといった物理的状態を持つところのもの (そしてそれ自体は物理的状態ではないもの) を意味する。他方、等式の右辺に含まれる「様態」とは伝統的に状態 (有り方・規定性) を意味する概念である。すなわち、「様態」

とは、伝統的に、物理的基体によって持たれるところの形や運動や大きさといった物理的状態（そしてそれ自体は物理的基体ではないもの）を意味する。それゆえ、「物体＝延長様態」という等式は、本来等置されるはずがないもの同士を同一視する特異な等式なのである。

デカルトにとって「物体」とは延長実体のことである。そして「実体」という語がデカルトにおいても（状態と対比される意味での）基体を意味する概念であったことは『省察』第2答弁付録から確認される。デカルトは言う。

定義5 我々が知覚する或るもの、言い換えると、その実在的な観念が我々のうちに存する或る固有性ないし性質ないし属性が、それを基体 (subjectum) として直接的に内在 (inesse) するところのもの、あるいはそれに拠って存在するところのもの、は、実体 (substantia) と呼ばれる。また、厳密に捉えられたる実体そのものについて我々は、次のような観念しか持っていない。すなわち、我々の知覚する何ものかが、言い換えれば、我々の諸観念の内に表現的に存するものが、形相的あるいは優勝的にその中に存在するところのもの、という観念である。というのも、いかなる実在的な属性も無には存し得ない、ということは自然の光 [=生得的な理性] によって明らかだからである。(AT, VII, p. 161)

また、「様態」という語がデカルトにおいても（基体と対比される意味での）状態を表わす概念であったことは彼の『哲学の原理』から確認される。デカルトは言う。

……ここで我々が「様態 (modi)」という語で意味するところは、別の場所で「属性 (attributa)」もしくは「性質 (qualitates)」という語で意味するところと全く同じである。しかし、これらによって実体が影響を被ったり、変化を受けたりすると考えられる場合には、それらは「様態」と呼ばれ、また、この変化によって実体がしかじかと称せられ得ると考えられる場合には、それらは「性質」と呼ばれ、そして最後に、いっそう一般的に、それらが単に実体に内在するのみ見なされる場合には、それらは「属性」と呼ばれるのである。(『哲学の原理』第1部56節；AT, VIII, p. 26)。

なお、デカルトは『哲学の原理』において延長様態の例としては「あらゆる形状 (figuræ omnes)、諸部分の位置 (situs partium)、それらの運動 (ipsarum motus)」を挙げている (第1部65節；AT, VIII, p. 32)¹⁾。

1) デカルトの「実体・様態」論については松田(2004)で検討したことがある。

スピノザが「実体」および「様態」という概念に関するデカルトのこのような用語法を熟知していたことに疑いは無い。にもかかわらずスピノザは、敢えて「物体＝延長様態」という等式を設定しているのである。どのような意図を持ってスピノザはこのような等式を設定したのであろうか。

2つの解釈が可能である。一方は、「延長様態の基体化」、すなわち、＜スピノザは、本来は物理的状態を意味する「延長様態」という概念を、物理的基体を意味するために用いている＞という解釈である。他方は「物体の状態化」、すなわち、＜スピノザは、本来は物理的基体を意味する「物体」という概念を、物理的状態を意味するために用いている＞という解釈である。

私は、以下において「物体の状態化」解釈を正当化する。

2. 「様態の基体化」解釈の問題

「延長様態の基体化」解釈とは、＜スピノザは、本来は物理的状態を意味する「延長様態」という概念を、物理的基体を意味するために用いている＞という解釈である。簡単に言えば、スピノザにとって「延長様態」とは物理的基体としての個々の物体を意味するのであって、物理的状態を意味するためにスピノザは「延長様態」という概念を用いてはいない、ということである。

「延長様態の基体化」解釈を否定する箇所は『短論文』の中に見出される。すなわち、スピノザは「……延長の内には運動 (beweging) と静止 (stilte) 以外の他の様態 (wyzinge) が存しない……」(『短論文』第2付録「人間の精神について」；G, I, p. 120) と書いている。ここでスピノザは延長様態とは飽くまでも運動および静止という物理的状態であることを明言しているのである。また、同様の箇所は『短論文』中において他にも有る。引用する。

……我々が延長のみを観察するとき、我々はその中に運動 (beweging) と静止 (ruste) 以外の何ものを認めない。この運動と静止から延長の全ての結果が生じることを我々は発見するのである。そして、物体におけるこの2つの様態 (wyzen) たるや、それ自身以外の如何なるもの〔例えば思惟様態〕によっても変化させられ得ないといった性質のものである。(『短論文』第2部第19章；G, I, p. 91)

この引用箇所でも、スピノザは運動と静止を延長様態と見なしていることがはっきり分かる。スピノザにとっての延長様態とは物理的基体ではなく物理的状態なのである。

しかし、以上の議論に対しては＜『短論文』はスピノザの最初期の習作的なテキストであり、

彼の成熟した思想を必ずしも反映していないため、論拠としては弱い>という反論が出るかもしれない。そこで私は、「物体の様態化」解釈を支持する（言い換えれば「延長様態の具体化」解釈を排除する）テキストを主著『エチカ』から取り出し分析する。それは『エチカ』第1部定理15備考の一部であり、スピノザの「物体」観を検討するために格好のテキストなのである。

3. 「物体の様態化」解釈の論拠

第1部定理15備考は、スピノザが、延長属性を神に帰属させる（＝神が物的実体であることを認める）ことに対する諸々の反対意見を予想した上で、それら反対意見を論駁しているかなり長い備考である。その後半でスピノザは、とりわけ<物的実体は分割可能である>という見解を取り上げ、これを論駁することに力を注いでいる。なぜならば、この見解こそ、反対者が諸々の反対意見を構成するにあたって土台としている基本前提だからである。私が注目するのは、まさにその、スピノザが物的実体の分割不可能性を論じている箇所である。以下に引用する（「①」「②」等の区切りおよび行空けは引用者に拠る）。

- ①……物的実体 (*substantia corporea*) が諸物体 (*corpora*) あるいは諸部分 (*partes*) から成るという仮定は、物体が面から成り面が線から成り最後に線は点から成るという仮定に劣らず不条理なのである。
- ②このことは明晰な推理が誤りないものであることを知るすべての人々、ことに空虚 (*vacuum*) の存在を否定する人々が容認しなければならないことである。
- ③なぜなら、もし物的実体とその諸部分が実在的 (*realiter*) に区別 (*distingere*) され得るようなふうに分割 (*dividere*) され得るものとしたら、その一部分が消滅して他の諸部分が依然として前のように相互に結合しているということも不可能ではなくなるであろう。また、空虚ができないような具合に全ての部分が接合しなければならないという理由もなくなるであろう。
- ④まったくのところ、相互に実在的に区別されるものにあつては、一つが他無しに有り得るしまたその状態 (*status*) にとどまり得るのである。
- ⑤しかし、自然の中には空虚なるものが存せず（これについては他の箇所で述べる）、全ての諸部分は空虚ができないような具合に互いに協力 (*concurrere*) しなければならないのであるから、このことからしてもまた、諸部分は実在的に区別され得ないこと、すなわち、物的実体はそれが実体である限り分割され得ないことが帰結されるのである。

- ⑥しかし、今もし誰かが、なぜ我々は生まれつき量 (quantitas) を分割する傾向を有するのかと尋ねるなら、私はその人にこう答える。
- ⑦我々は量を二様の仕方で考える。一つは抽象的 (abstracte) にあるいは皮相的 (superficialiter) にであり、これは量を {普通に} 表象する場合である。
- ⑧他は量を実体として考える場合であり、これは単に知性のみによって {表象の助けを借りずに} 行われる。
- ⑨ゆえに、もし我々が表象においてあるままの量に心を留める (これはしばしばそしてより容易に我々のするところだが) なら、量は有限で可分的で部分から成るものとして現れるであろう。
- ⑩これに反しても知性においてあるままの量に心を留め、そしてこれを実体である限りにおいて考える (これはきわめて困難なことだが) なら、それは、我々がすでに充分示したように、無限で唯一で不可分なものとして現れるであろう。
- ⑪このことは表象 (imaginatio) と知性 (intellectus) とを区別することを知っているすべての人に充分明らかであろう。ことに物質 (materia) はいたるところで同一であってその諸部分は物質が多様 (diversimode) に変状 (affici) していると考えられる限りにおいてのみ区別されるのであり、したがって、その部分は様態的 (modaliter) にのみ区別されて実在的 (realiter) には区別されないということにも注意するならば、いっそう明らかであろう。
- ⑫例えば水は水である限りにおいて分割されまたその諸部分は相互に分離されると我々は考える。しかし、それが物的実体たる限りにおいてはそうでない。その限りにおいては、水は分離されも分割されもしない。さらに、水は水としては生じかつ滅する。しかし、実体としては生じることも滅することもない。

以上に引用したスピノザの議論を整理する。

スピノザは2つのタイプの諸命題を対立させている。第1のタイプ——これを「タイプA」と呼ぼう——の諸命題は次の通りである (カッコ内はその命題が見出される箇所を示す；以下同様)。タイプAの諸命題は<物的実体は分割可能である>という同じ意味内容を持つものとして取り扱われている。

- (イ) 物的実体は諸物体から成る (テキスト①)
- (ロ) 物的実体は諸部分から成る (テキスト①)
- (ハ) 物的実体はその諸部分が実在的に区別され得るような仕方で分割され得る (テキスト③)

- (ニ) 自然の中の諸部分は実在的に区別される (テキスト⑤)
- (ホ) 物的実体は実体である限りにおいて分割される (テキスト⑤)
- (ヘ) 量は有限で過分的で諸部分から成る (テキスト⑨)

第2のタイプ——これを「タイプ B」と呼ぼう——の諸命題は次の通りである。タイプ B の諸命題は〈物的実体は分割不可能である〉という同じ意味内容を持つものとして取り扱われている。すなわちタイプ B の命題はタイプ A の命題の否定である。

- (ト) 量は無限で唯一で不可分である (テキスト⑩)
- (チ) 物質はいたるところで同一である (テキスト⑪)
- (リ) 物質の諸部分は物質が多様に変状していると考えられる限りにおいてのみ区別される (テキスト⑪)
- (ヌ) 物質の諸部分は様態的にのみ区別されて実在的には区別されない (テキスト⑪)
- (ル) 例えば、水は水である限りにおいて分割されまたその諸部分は相互に分離されるが、水は物的実体である限りでは分離も分割もされない (テキスト⑫)
- (ヲ) 例えば、水は水としては生じかつ滅するが、水は実体としては生じることも滅することも無い (テキスト⑫)

スピノザはタイプ A の命題が偽でありタイプ B の命題が真であることを、引用箇所の前半で論証する。その論証方法は次のようなものである。

スピノザは、次に示す命題 (ワ) を前提としている。

- (ワ) 相互に実在的に区別されるものにあつては、一つが他無しに有り得るし、またその状態にとどまり得る (テキスト④)

そして、命題 (ワ) が前提とされる限り、タイプ A の命題は次に示す命題 (カ) および命題 (ヨ) を含意する (換言すれば、命題 (ワ) とタイプ A の命題との連言は命題 (カ) および命題 (ヨ) を含意する)。

- (カ) 物的実体の一部分が消滅して他の諸部分が依然として前のように相互に結合していることは可能である (テキスト③)
- (ヨ) 物的実体の全ての部分が空虚が出来ないように具合に接合しないことは可能である (テキスト③)

他方、スピノザによると次の2命題(タ)・(レ)は真である。

- (タ) 自然の中には空虚が存しない(テキスト⑤)
- (レ) 自然の中の全ての部分は空虚が出来ないような具合に互いに協力しなければならない(テキスト⑤)

そして、命題(タ)も命題(レ)も命題(カ)および命題(ヨ)と矛盾する。ゆえにタイプAの命題は偽であり、タイプAの命題の否定であるところのタイプBの命題は必然的に真となるのである。——以上が、物的実体の分割不可能性についてスピノザが示す論証である。

物的実体の分割不可能について我々が或る時は正しい認識に至り或る時は間違った認識に至るその原因を、スピノザは、量についての我々の2種類の認識様式の差異に求める。その議論が引用箇所の後半で展開される。第1の認識様式は次のような表現で示されるものであり、この様式が「物的実体は分割可能である」という間違った認識を生む。

- (a) 量を抽象的あるいは皮相的に考える(テキスト⑥)
- (b) 量を表象する(テキスト⑦)
- (c) 表象に有るままの量に心を留める(テキスト⑨)

第2の認識様式は次のような表現で示されるものであり、この様式が「物的実体は分割不可能である」という正しい認識を生む。

- (d) 量を実体として考える(テキスト⑧)
- (e) 量を知性のみによって考える(テキスト⑧)
- (f) 知性において有るままの量に心を留める(テキスト⑩)
- (g) 量を実体である限りにおいて考える(テキスト⑩)

引用したスピノザの議論を整理すると以上ようになる。

スピノザは決して「物的実体においては如何なる意味においても諸部分が区別され得ない」と言っているわけではない。彼は物的実体において諸部分が「実在的に区別」(テキスト③・⑤)されることを否定してはいるが、それらが「様態的にのみ区別」(テキスト⑪)されることは認めているのである。それでは、物的実体において「諸部分が実在的に区別される」と「諸部分が様態的にのみ区別される」とは如何なる事態を意味するのだろうか。引用箇所の議論を整合的に理解するためには、「諸部分が実在的に区別される」

とは<諸部分が別個の物理的基体である>という事態であり、<諸部分が様態的にのみ区別される>とは<諸部分が別個の物理的基体ではなく物理的狀態による諸々の構成物にすぎない>という事態である、と理解しなければならない。

知性ではなく表象力によって物理的世界を「抽象的かつ皮相的」(テキスト⑥)に見る限り、我々の眼には、諸物体とは、様々な物理的狀態を持つところの複数の物理的基体であるように見える。そして、物理的世界とは、物理的基体としてのそれら諸物体から構成されているように見える。この見地からは、物理的世界は諸物体へと分割され得ることになる。しかしこれは形而上学的には間違った自然像である。知性によって物理的世界を捉えるならば、物理的世界には複数の物理的基体が存在しない。なぜならば、複数の物理的基体が存在するならば空虚が可能となるからである(空虚の不可能性をスピノザは前提としている)。したがって、物理的世界の中に存する諸物体とは、別個の物理的基体ではなく物理的狀態による諸々の構成物にすぎない。言い換えれば、物理的世界の中において運動や静止といった物理的狀態が継起するさいに立ち現れる諸々の図柄が諸物体の正体なのである。ゆえに、諸物体の区別とは要するに物理的狀態の図柄の区別(これが「様態的な区別」である)にすぎない。物理的世界それ自体は分割され得ない。物理的世界とは、その中において様々な物理的狀態が継起するところの、それ自体は唯一不可分な存在者なのである。

引用箇所最後にスピノザは「水の比喩」を提示している。水という物体を構成する物理的狀態は刻々と変化し得る。すなわち、「水」と呼ばれる物理的狀態の図柄は複数の図柄へと分割され得るし、その限りで水の「諸部分は相互に分離される」と言ってよい。しかし、それは、「水」と呼ばれる物理的基体が分割されるということではない。なぜならば物理的基体は存在しないからである。その意味で「水は分離されも分割されもしない」のである。「水」と呼ばれる物理的狀態の図柄は生成消滅する(あるいは継起する)。他方、「水」と呼ばれる物理的狀態がそこに有るところの物理的世界は無限・唯一・不可分な存在者として「生ずることも滅することもない」のである。

4. 物体の場所的移動

以上に見たように『エチカ』第1部定理15備考は「物体の狀態化」解釈が正しいことを指し示している。しかし、「物体の狀態化」解釈に対しては幾つかの無視できない疑問が持ち上がるであろう。本論の後半ではそれらの疑問に対処する。

本節で扱う疑問は、<物理的基体無しに(=物体を物理的基体と見なさずに)、物体の場所的移動をどのように理解できるのか>というものである。常識的な理解によれば、特定の物体の場所的移動とは、まさに、特定の物理的基体が或る空間領域から別の空間領域へと(同

一性を維持しながら) 移動することである。物体の場所的移動についてこれ以外の解釈が無いとするならば、物理的基体を認めないスピノザの自然像は——あるいはスピノザの自然像をそのようなものと捉える「物体の状態化」解釈は——破綻するのではなからうか。

この点に関してジョナサン=F=ベネット (Jonathan F. Bennett; 1930-) が興味深い見解を提示している。以下にその概要を紹介する。

ベネットはその著『スピノザの「エチカ」の研究』(Bennett, 1984)において、やはり『エチカ』第1部定理15備考等に依拠しつつ、「場の形而上学 (Field Metaphysic)」という名前の下で、スピノザの物体観に関して、上に私が示した解釈とほぼ同じ解釈を示している。彼は言う。

場の形而上学は、かなり明確な意味で、個々の延長物を、諸々の空間領域に対する形容的なものと見なす (The field metaphysic does, in fairly clear sense, make particular extended things adjectival on regions of space)。赤面は顔に対して形容的である、なぜならば、赤面の存在は顔が赤いということであるからだ。また〔同様に〕、小石は空間に対して形容的である、なぜならば、小石の存在は空間が然々だということだからだ。より明確に言うならば、〔個々の延長物が存在するというのは〕空間が、或る種の条件を充たす一連の時空に属する、一つながりに連結した諸領域を含んでいる、ということである (space's containing a connected sequence of regions belonging to a string of place-times which satisfy certain conditions)」(Bennett, 1984, p. 95)。

スピノザの物体観によれば個々の物理的基体が物理的状態(延長様態)を持つのではない、という点でベネットの解釈は私のそれと全く一致している。ただし、差異も有る。ベネットは更に一步進めて、<スピノザの物体観によれば空間領域が物理的状態を持つ>とまで主張する。例えば「水の比喩」に関して言えば、ある空間領域そのものが「水的(watery)」という物理的状態を持つのである、と彼は主張する。他方、私は、スピノザのテキストが「空間領域が物理的状態を持つ」という定式化を許容するとまでは言わない。スピノザのテキストが許容するのは、「空間領域に物理的状態が有る」という定式化までであろう。

いずれにせよ、ベネットの「場の形而上学」は少なくとも物理的基体の不在という論点を含んでいる。そしてベネットは、<物理的基体の不在という前提の下で、物体の場所的移動はどのように解釈され得るのか>という疑問に対して、次のような非常に興味深い回答を提示しているのである。

スピノザの基本的〔=形而上学的〕次元においては、〔空間の〕占拠者(occupants)〔=物理的基体〕が存在するのではなく空間のみが存在し、異なる諸々の空間領域が秩

序だった仕方で変化してゆく (altering in orderly ways) だけである。性質が空間を「移動」という言い方は可能だろうが、それは、雪解け (thaw) が地方を「移動」というのと似ているのであって、それは文字通りの移動なのではない。(Bennett, 1984, p. 106)

すなわち、所謂「物体の場所的移動」とは、或る空間領域から別の空間領域へと物理的基体が移動することとしてではなく、或る空間領域から別の空間領域へと物理的状態がリレーされてゆくこととして捉えられるのである。ベネットは「雪解け」という比喩を用いているが、別の比喩として、電光掲示板を想起することができよう。電光掲示板で文字が移動するとき、実際には、物理的基体の移動は無い。そこに有るのは、「発光」という物理的状態が或る空間領域から別の空間領域へとリレーされてゆくことだけである。更に別の比喩としては水面上の波を想起することができよう。水面を波が移動するとき、やはり実際には、物理的基体の移動は無い。そこに有るのは、「振動」という物理的状態が水面の或る領域から別の領域へとリレーされてゆくことだけなのである。

今、隣接する空間領域 a, b, c, d, ……を想定する。また、仮に時間の系列として離散時系列 (第1世代, 第2世代, 第3世代, ……) を想定する。そうすると、物体の場所的移動とは次のように説明できる。初期状態では空間領域 a に有った物理的状態 A (例えば振動) が、世代が変わるごとに、空間領域 b, c, d へとリレーされてゆく。このとき我々は、「抽象的あるいは皮相的」(第1部定理15備考) に捉える場合、何らかの物理的基体が a から d の場所へと移動した、と考える。しかし、実際には、そのような物理的基体は無い。有るのは、物理的状態の秩序だったりレーによって描き出される図柄である。そして、この図柄そのものがスピノザの言う「物体」なのである。すなわち、「物体」という物理的基体が物理的状態の図柄とは別個に存在するのではなく、物理的状態の図柄以上でも以下でもないものとして物体は規定されるのである。

5. 物体の通時的同一性

本節で扱う、「物体の状態化」解釈に対する反論は、物体の通時的同一性の問題に係わるものである。物体が物理的基体であるならば、物体の通時的同一性はまさに、物理的基体の通時的同一性として理解される。何らかの物体の物理的状態が如何なる変化をしようとも、当該の物体が物理的基体としての同一性を保持する限り、それは「同じ」物体なのである。他方、物理的基体無し自然像を採る場合、当然ながら、物体の通時的同一性をこのような仕方で規定することは不可能となる。その場合、飽くまでも物理的状態にのみ依拠しつつ物

体の通時的同一性を再規定しなければならないのである。実際のところスピノザはそのような再規定を——全く定性的な仕方ではあれ——試みているのである。

①物体は運動および静止，速さおよび遅さに関して相互に区別され，実体に関しては区別されない（*Corpora ratione motus, & quietis, celeritatis & tarditatis, & non ratione substantiae ab invicem distinguuntur*）。(『エチカ』第2部「自然学的付論」補助定理1)

②同じあるいは異なった大きさのいくつかの物体が，他の諸物体から圧力を受けて，相互に接合するようにされているとき，あるいは……自己の運動を或る一定の割合で相互に伝達するようにされているとき，我々はそれらの物体が互いに合一していると言い，また全てが一緒になって一物体あるいは一個体を組織していると言う。そしてこの物体あるいは個体は，構成諸物体のこうした合一によって他の諸物体と区別される。(『エチカ』第2部「自然学的付論」「個体」定義)

③7) 現実に存在するありとあらゆる個物は運動 (*beweging*) と静止 (*stilte*) とによって然々のもの (*zulks*) になる。そしてこのことは，我々が物体と名付ける実体的延長の全ての様態について当てはまる。

8) これらのものに見られる相違性 (*verscheidenheid*) はただ運動と静止の異なる比 (*proportie*) からのみ生じ，それによってこれ (*dit*) が然々のよう (*zoo*) であって然々のよう (*zoo*) でなく，またこれ (*dit*) がこれ (*dit*) であってあれ (*dat*) でないということになる。(『短論文』第2部序言；G, I, p. 52)

テキスト①は最単純物体（すなわちスピノザの自然学における基本粒子）について述べられたものである²⁾。最単純物体の区別は物理的基体の区別に基づくのではない。それは飽くまでも「運動および静止，速さおよび遅さ」という物理的状态の区別に基づくのである。前節での「水面の波」の比喩を用いれば，最単純物体の通時的同一性は，水面を移動する物理

2) テキスト①の文言には「最単純物体」という表現は出ていないが，このテキストの「物体」が最単純物体を指すことは「自然学的付論」公理2および補助定理7備考から明らかである。公理2の末尾でスピノザは次のように言う。「以上是最単純物体について，すなわち，単に運動および静止，速さおよび遅さによって相互に区別される物体についてである」。また補助定理7備考の中でスピノザは次のように言う。「これまで我々は単に運動および静止，速さおよび遅さによって相互に区別される諸物体からのみ組織されている個体，言い換えれば，最単純物体からのみ組織されている個体を考えた」。以上のようにスピノザは「単に運動および静止，速さおよび遅さによって相互に区別される諸物体」を「最単純物体」と置換可能なものとして扱っているのである。

的状態の相違に基づくのである。今、仮に遅い波を速い波が時間 t において追い抜いたとしよう。このとき、時間 t 前後における遅い波の通時的同一性と時間 t 前後における速い波の通時的同一性は何に依拠するのか。それはまさしく、遅い波を構成する物理的状态のリレーの遅さであり、速い波を構成する物理的状态のリレーの速さに他ならないのである。リレーの遅い速いという物理的状态に係わる相違こそが最単純物体の遅い波と速い波を存在せしめておりそれらの通時的同一性を基礎付けているのである。

テキスト②はより要素的な物体から構成される複合物体の通時的同一性の基準を規定している。要するに、構成要素たる諸物体の「運動と静止の比 (ratio)」(これはテキスト②ではなくその後の補助定理 5 に登場する表現である) が保持される限りは複合物体の通時的同一性が保たれる、という規定である(構成要素たる諸物体が「相互に接合」している場合は、「運動と静止の比」が保たれる極限的なケースとして解される)。この規定は、差し当たり最単純物体から個性される複合物体に適用されるが、更には、そのような複合物体から構成されるより高次の複合物体にも再帰的に適用され、極限的には「全自然 (tota natura)」(補助定理 7 備考) にも適用されることになる。

テキスト③は『短論文』からのものであり、すでにこの最初期の文献でスピノザは複合物体の通時的同一性についてテキスト②の場合と同じ見解を示している。「運動と静止の比 (proportie)」こそが「これ (dit) がこれ (dit) であってあれ (dat) でない」という物体の同一性の根拠だと言うのである。

もっとも、残念ながらスピノザのコーパスには「運動と静止の比」についての、具体的計算を可能にするような定量的な説明は一切見当たらない。彼の議論は全く定性的なものに終始している。すなわち、スピノザは物体の通時的同一性に関する着想を数学的自然学の方に発展させることが出来なかったと言わざるを得ない。しかしながら、彼の自然観の基本的部分に関して我々は、次のことをはっきりと確認することは出来る。すなわち、スピノザは、「物体」とは物理的状态による構成物であるという「物理的基体無し自然観」を抱いており、物体の通時的同一性についても、「物理的基体無し自然観」に対して整合的に、その基準を物理的基体に依拠させるのではなく飽くまでも運動や静止といった物理的状态に依拠させたということである。

6. スピノザと粒子論

本論の最後に、「物体の状態化」解釈に対するもう一つの反論を取り上げる。それは、<スピノザが粒子論的な自然学を素描するとき、そこには「物体の状態化」解釈にとって不利に見える文言が頻出する>という反論である。

そのような文言が現れるテキストとして典型的なものは、『エチカ』第2部定理13以下の所謂「自然学的付論 (Physical Digression)」である。そこには、まさしく、〈基体としての物体が、運動や静止という物理的状态を持つ〉という基本的自然像を前提としているように見える文言が多く見出される。その典型的な実例は次のようなものである。

公理1 全ての物体は運動しているか静止しているかである。

公理2 各々の物体は或る時は緩やかに、或る時は速やかに運動する。

補助定理2 それら [=全ての物体] は、或る時は緩やかに、或る時は速やかに運動し得るという点で、一般的に言えば、或る時は運動し或る時は静止するという点で、一致する。

補助定理3 運動あるいは静止している物体は、他の物体から運動あるいは静止するように決定されなければならなかった……。

公理1 ある物体が他の物体から動かされる一切の様式は、動かされる物体の本性からと同時に動かす物体の本性から生じる。……

公理2 運動している物体が静止している他の物体に衝突してこれを動かすことができない場合には、それは跳ね返って自己の運動を継続する。……

これらの箇所では「物体」と言われているのは最単純物体のことである³⁾。そして確かに書面を見るだけではこれらのテキストは、物理的基体としての最単純物体が或る時は緩やかな運動という物理的状态を、或る時は速やかな運動という物理的状态を持つ、という図式を前提としているように見えるかもしれない。しかし、それは単にそのように「見える」だけのことにすぎない。

そのように「見える」理由は2つ有る。

第1の理由は、公理1と公理2の直後にスピノザが補助定理1「物体は運動および静止、速さおよび遅さに関して相互に区別され、実体に関しては区別されない」を置いた訳を正しく認識しないということである。スピノザはまさしく、〈最単純物体が物理的状态を持つ〉

3) これについては脚注2を参照のこと。

という先入見を封じたいがために「自然学的付論」の早々の箇所にこの補助定理を置いているのである。しかもその証明において、とりわけ第1部定理15備考を参照しているのである。まさにこの備考こそは、スピノザの「物理的基体無しの自然像」を最も如実に示すものであった。

第2の理由は、＜スピノザは17世紀当時の「粒子論 (corpuscular theory/corpuscularianism)」にコミットしていた＞という不正確な認識である。確かに「自然学的付論」におけるスピノザの言葉遣いは粒子論的である。＜最単純物体から複合物体が構成され、その複合物体からさらに高次の複合物体が構成される。個々の最単純物体は他の物体に衝突するまでは運動ないし静止の状態を続ける。最単純物体の離合集散によって複合物体の生成消滅が生起する＞——という趣旨のスピノザの議論は、ガッサンディやデカルトといった先達、またボイルやロックといった同時代人と共にスピノザを「粒子論者」の1人と数えさせるに充分なものに見える。しかしながら、ガッサンディ、デカルト、ボイル、ロックといった粒子論者とスピノザを分かつ重要な形而上学論点がある。それは、彼らと異なりスピノザが物理的基体としての粒子を認めないということである。彼にとって物体とは物理的状态による構成物にすぎない。延長世界に存するのは物理的状态のみであり、物理的状态と別個に物体が存在するのではないのである。確かにスピノザは粒子論的な言葉遣いをする。しかし、粒子論の条件の一つに＜粒子は物理的基体である＞という主張を含めるならば、彼は粒子論者ではないのである。

スピノザの粒子論的な表現は一見すると物理的基体を前提しているように見える。しかしそれは単にそのように「見える」だけのことである。この点に関して読み手は注意しなければならない。そして、「自然学的付論」を読解する場合には、物理的基体を滑り込ませないような仕方でも文意を理解しなければならない。一例を挙げておく。公理1「すべての物体は運動しているか静止しているかである」は、次のように理解されねばならない。「物体を構成する物理的状态としては運動と静止が有り、それ以外のものは無い」。そしてこの主張は、他でもない、私が本論の第2節ですで見たと主張、すなわち『短論文』第2付録における「延長の内には運動と静止以外の様態が存しない」という主張とほとんど変わるところが無いのである。

文 献

* スピノザのテキストは、ゲーブハルト版全集、すなわち、*Spinoza Opera*, 4 Bde, herausgegeben von Carl Gebhardt (Heidelberg: Carl Winter, 1925) に拠った。

* 本論で引用した諸著作の原題は以下の通りである。

『神、人間及び人間の幸福に関する短論文』(略して『短論文』): *Korte Verhandeling van God/de Menschen deszelfs Weltstand*

『幾何学的秩序に従って論証された倫理学』(略して『エチカ』) : *Ethica Ordine Geometrico Demonstrata*

- * 『エチカ』からの引用の場合は、巻数・ページ数によってではなく、定理や定義等を表示することで引用箇所を表示とした。『短論文』からの引用の場合は、ゲーブハルト版全集を「G」と著し、後に、巻数とページ数を表示した。
- * 『エチカ』からの引用の際、1677年の『ラテン語遺稿集』ではなく『オランダ語訳遺稿集』にある語句(それらはゲーブハルト版において拾われている)は、中括弧「{ }」の中にその語句を書く。
- * スピノザのテキストの日本語訳に際しては、岩波文庫所収の畠中尚志氏によるものに原則的に依拠し、箇所によっては引用者(松田)の責任において訳し変えた。
- * デカルトのテキストは以下に拠り、これを A.T. と略記する。
OEuvres de Descartes, 12 vols., édition Adam et Tannery (CNRS, 1964–74).

Bennett, Jonathan (1984): *A Study of Spinoza's Ethics* (Cambridge University Press).

松田克進 (2004): 『『哲学の原理』第1部におけるデカルトの実体論』、『人間環境学研究』(広島修道大学人間環境学会編) 所収。